

一九九九年ドイツ

— その知的風景 —

中 尾 健 二

一 ホテル

一九九九年一月十五日金曜日、降り立ったベルリンは暖冬だった。もつともそう意識したのはずいぶん後になってのこと、着いた当初は、慣れぬ土地での十ヶ月間にわたる暮らしをスタートさせる準備に忙殺されていたからである。日本からインターネットで探し出し、予約してあったヘーア通り八十番地のホテルに空港から着いたのは夕刻七時、フロントで鍵をもらい、アパート風に建てられた別館のドアをがちゃがちゃやっていたら、階段を駆け下りてきた男性が中からドアを開けてくれた。じつはこの男性、ホテルの従業員ではなく、電気か電話工事の技師であった。以前メールで部屋からパソコンをインターネットに接続できるかどうか問い合わせたら「そのための器具をさっそく設置します」というホテルからの返事をもらっていたのである。居間の内線電話から分岐させてモジュラー・ジャックが設置されていた。長旅の疲れを癒す間もなく、二人で居間のカーペットに座り込んで、ベルリンのアクセス・ポイントにつなごうとしたが、私のパソコンではどうしても「ビジー（お話中）」になってしまう。内線電話のビーブ音をクリアできないようだ。一時間以上二人であれこれ試してみたが結局駄目で、「苦劳かけてすまない」と労をねぎらったら「僕も楽しんでよ」と言っただけの、日本語ウィンドウズ相手では気の毒だった。これでさらにくたびれて、この夜は（日

本時間ならもう朝だ」カップヌードルをすすって寝てしまった。

次の晩このクルムホルツさんがまたあらわれ、A4判一ページの「中尾さんのインターネット接続について」と題された書類を持参、私とフロントに手渡してくれた。現状とその対処法がくわしく書かれていた。要するに「フロントで直接外線に接続させ、開始と終了の時刻をチェックして市内電話料金を徴収せよ」というものだった。翌朝フロント嬢からも「コーヒーでも飲みながらここでやればいいじゃない」と言われ、うれしくもあったが、やれやれ面倒なことになったと気が滅入った。実際にフロントに入りこんでパソコンをつないだのは月曜日の夜。フロントは電話交換機とパソコンやプリンターが置かれた四畳半ほどの狭いスペースで、この時はマネージャーのフリックおばさんが勤務していた。「あら、どこにつなげばいいのかしら」と機械には弱いらしい。六畳くらいの続きの間に引っこんでしまったので、パソコン・デスクの下にもぐりこんでドイツ規格のごついプラグを適当なジャックにつないだら接続成功、メールの送受信ができた。しかし、この窮境はなんとかせねばと考え、居間のブランチになっている電話機で外線発信を選び、すぐにパソコンに電話をかけさせるという方法を思いつき試してみたら、これがうまくいった。数日間こんなアナログ的方法でやっていたところ、日本の同僚からメールで「ハトーンをまってダイヤルするVのチェックマークを外してみたら」という忠告。そのとおりにやってみたら問題解決、わかってみればなんのことはなかったのである。

パソコン・デスクの下にもぐりこんだ、その同じ夜にフリックさんのサインをもらった。ベルリンに着いて最初の仕事は住民登録とこころえ、部屋にあった電話帳で最寄の警察署をしらべ、月曜日の朝ヘーア通りを東へ、つまり街の中心へむかってテオドーア・ホイス広場まで三十分近く歩いた。警察署はあったが、そのドアの前には「住民登録関係業務は閉鎖しました」とあった。しかたなくさらに先のカイザー・ダムの警察署をめざして大通りを歩くことまた三十分近く、がっちりとした堅固な濃茶の建物があらわれた。緑と白の塗装のパトカーが前に数台駐車していたので、すぐにそれ

とわかった。出遅れたせいもあって、すでに多くの人々が各種手続に訪れていたもので、かなり待たされることになった。その間玄関ホールで逃げ出そうとした男を数名の警察官がとりおさえる騒ぎがあり、警察署にふさわしい剣呑な雰囲気をつくりだす幕間劇のようだった。「なんでこうした手続が警察署なんだろう」と思つて周囲を見回すと、みな心なか緊張した面持ち。手にした番号札の数字のところにランプが点つて指定された部屋に入ると、パソコンを前にした中年の女性が座っていた。やりとりは事務的でもものの一分もかからず、家主のサインが必要とのことで、あらためて出直すことになった。ホテルならマネージャーのフリックさんのサインでよかろうと考え、その夜サインをもらいに行ったのである。「あらー、そんなところへよく行ったわね。うちのお客さんでそんなことをした人は今までいないわ」「でも三ヶ月以上滞在する場合は必要なんです」と立場が入れ替わつたようなやりとりの後、フリックおばさんは腑に落ちない顔をしつつも書類にサインをしてホテルのスタンプをぺたんと押してくれた。

後日招待状を書いてくれたアルブレヒト・ヴェルマー教授の秘書グンベルさんにベルリン自由大学図書館の図書借出票をつくつてもらつたことを話すと「えー、じゃあ警察署へ行ったの。感じ悪いわよね。ナチと同じよ」「(なにもそこまで言わなくても)」「外国から来た教授たちも住民登録が必要だと聞いて借出票を諦めちゃうのよ」との反応だった。みな警察は苦手のようだ。しかし、住民登録証だけで図書借出票をつくってくれるということは、大学図書館が市民に開かれていることではないかと私はまた別の感想をもった。とはいえ、不勉強の私はその後これを活用することなく、ゼミに参加させてもらつた演劇学科の図書室とその十円コピーをもつばら愛用しただけで、つくつてもらつたこと自体が成果ということで終わった。

二 コンボ

ホテルのフロント前の階段を降りて地階にいくと、右手に小さなブルー、左手にバー・カウンタがあり、その奥が食堂になっていた。バー・カウンタ前のテーブルには毎朝二種類の新聞、ベルリナー・ツァイトウングとベルリナー・モルゲンポストがそれぞれ十部ほど並べられていて、少し落ち着いてからは朝食後前者を一部部屋に持ちこんで目をとおすことが日課になった。前者を選んだのは、サイズがモルゲンポストより小ぶりで扱いやすかったからにすぎない。紙面の構成とレベルは日本で三大紙と呼ばれているものとはほぼ同じ、面白そうな記事があると切り抜いてクリア・ブックに挟みこんだ。

一九九九年上半期最大の事件はコンボ戦争である。三月二十四日夜シュレーダー首相の大写しの顔がテレビ画面に映り、静かな声で淡々とNATO軍によるユーゴ空爆開始を告げた。これによって第二次世界大戦後はじめて、少数の戦闘機だけとはいえドイツ軍が実戦に参加することになった。それもかつてナチの軍隊が席卷した東欧地域への派遣である。しかし、最初から地上戦なしと腰がひけていたためもあってか、開戦にともなう高揚感も激昂した非難の声もなく、闇について出撃するトルナード戦闘機の孤独な映像だけが緊迫感を伝えていた。武力行使にふみきる理由としてシュレーダー首相が述べたのは「人権の組織的な侵害と人道上の惨事を阻止するため」というものであった。もちろん政権を担う社会民主党および緑の党内部では、空爆をめぐる緑の党の臨時党大会がぶつ続けで放映され、たまたまその一部を観たが、賛否の演説にはほぼ同じくらいの拍手がわきおこるといった状態だった。とはいえ大方の世論は、フィッシャー外相の「私は八二度と戦争はおこさない」と言ったが、八二度とアウシュヴィッツはおこさない」とも言った」という発

言を支持したように思える。言いかえれば「人道上の惨事を阻止する」という参戦の論拠は覆らなかったことになる。ドイツ連邦共和国は建国後五十年、ベルリンの壁崩壊後十年にして、連日テレビ画面に映し出される、国境に着の身着のまま続々と押しよせるコソボ・アルバニア人難民の映像とユーゴ空爆の轟音の中で「普通の国家」になったのである。コソボ戦争については、テレビで報道される事態の推移に気をとられていたせいか、新聞の切り抜きは意外に少ないが、まずベルリナー・ツァイトウング三月二十五日号の学芸欄にのったシュテファン・シュバイヒアーの評論をあげよう。「われわれはいかにして、われわれがあるところのものに、すなわち戦争の心構えがあるものになったか」というタイトルに「壁崩壊の最後の犠牲者は西ドイツの平和主義である」と副題が付された文章である。その冒頭部分を紹介する。

平和主義的なドイツ人を戦争の心構えがある国民にするためには、十年の歳月が必要であった。バルカンでの戦争の脅威は、まだ空軍の少数のスペシャリストたちの事柄である。とはいえ、それはやはり戦争であり、しかもその戦争は是認されている。抗議の世論は起こらなかったし、メディアは最初の上空からの攻撃V₂がもたらす結果が予測不可能であることにひよつとすると警告を発するかもしれないが、道徳的な正当化は疑問視されていない。テレビには胴体に鉄十字をつけた戦闘機がゆつくりと離陸する姿が写しだされた。われわれは戦争においてもまた、ふたたびしかるべき何者かなのである。ドイツの地からは平和だけが生じる、とはこれからはもう躊躇なく言うことはできなくなるだろう。

ベルリンの壁崩壊が東西冷戦の終焉を象徴する出来事であったとすれば、その十年後にドイツ軍がコソボ戦争に参戦

したことは、そこから生じる帰結がどのようなものであるかをはっきりと示したと言えるかもしれない。少なくともヨーロッパでは、冷戦の終結は大きな構造変動を引き起こしている。環境保護とやらで反核平和を旗印にしてきた緑の党執行部が、今回空爆やむなしに傾いた意味は重い。西ドイツの平和主義もまた、東西冷戦という枠組の中で成立してきた以上、この枠組自体が崩れたときにその命脈を絶たれたのである。もちろん原理的な平和主義というものは依然として存在するし、存在すべきだろう。「武器なしにヨーロッパをつくろう (Europa schaffen ohne Waffen)」をスローガンとする復活祭の平和行進は近年になく盛り上がりを見せ、武力によって問題を押さえこむことは問題の真の解決にはならないことは、誰もが多かれ少なかれ認識してもいよう。ではしかし、武力以外に目の前で起こっている「人道上の惨事」をくい止める有効な手だてがはたしてあっただろうか。ボスニア内戦時に起きた「スレブレニツアの虐殺」の記憶が誰しもの頭をよぎったかもしれない。またあれを繰り返さぬのかと。こうして「人権のための空爆」が是認されたのである。普遍主義的倫理への訴えと暴力による問題解決が結びつけられた、この矛盾にみちた表現が今回の事態を集約している。国益あるいは地域的な利害を、あるいは広く特殊な利害を貫徹するための戦争は、普遍主義的倫理への人々の感受性が高まったために、少なくとも大義名分としては成立しにくくなった。だからといって、諸国家の上に諸国家の行動をコントロールする、この倫理に対応した実力をもった法廷が存在しているわけでもない。ボスニア内戦にかかわって戦犯として訴追されている多くの人々が、依然としてハーグの国際法廷に姿をあらわしてはいない。普遍主義的倫理は、現段階では特殊な諸国家の壁を越えきれないし、また特殊な諸国家によって実現されざるをえないという矛盾の中にある。前者であることによって弱さを露呈し、後者であることによって歪められてしまっているのである。こうした矛盾を動力にしてそれは前進するとヘーゲル風に言えなくはないにしても。

もう一つは同紙三月二十九日号の「教授たちの戦争」と題されたイエンス・イエッセンの短いコラムから。

木曜日の晩に今ではよく知られたセルビアの殺人部隊が、プリシュティナ大学の文学研究者でもある詩人ラティフ・ベリシヤを家族ともども処刑した。このニュースそのものは、その他の報道以上に戦慄をあたえるものではない。しかしこのニュースは、バルカンでの紛争が土地と居住地域をめぐるばかりでなく、アイデンティティと歴史観をめぐるものでもあるということに今一度注意を向けさせるのである。（中略）第一次世界大戦の敗北の後、いかに教授たちと文学者たちが、人種の憎悪とゲルマンの世界支配の要求とを知的に裏打ちしたかを体験したドイツ人以上に、このことをより良く理解できるものはいない。

今回のコソボをめぐるアルバニア人とセルビア人の紛争には、双方の対立する歴史観が影を落としていることは、日本でも比較的よく知られている。政治の回路へと歴史観（集団的アイデンティティの問題）が取りこまれ、政治によってこれが大々的に利用されたのである。そもそもミロシェヴィチが長く政権の座にありえたのは、コソボでは少数派のセルビア系住民の不満を梃子に大セルビア主義という民族主義を煽り、この波にのつたからにはかならない。彼は大衆に父祖以来の敵と自民族肯定の物語を与え、大衆もこれに応えたのである。文学と人文科学がここで重要な役割を演じていることは、文明開化ではなくむしろ野蛮化を告げる凶兆なのである。セルビア側がアルバニア系の詩人を殺害する一方で、NATO軍はベオグラードの放送局を準軍事的施設と見なし、これを爆撃して多数の死傷者を出した。お互いの対抗措置は文字通り野蛮な方法になった。世に「ペンは剣よりも強し」と言われているけれども、この言葉はペンの中にこそ野蛮な暴力がひそんでいると読みかえるべきなのかもしれない。

われわれは「文学」から、歴史の過剰な物語化から、つまり歴史を素材に感動と怨念の物語を紡ぎ出すことからどれだけ自由になれるだろうか。さしあたり対立する陣営同士で合意しうる史実（―）を積み上げ、その後で歴史を構成す

る価値観点は個人の自由競争にゆだねるしかないだろう。前者を研究者共同体の流儀にゆだね、後者を意見の民主制にゆだねるべきなのだ。一方で「日の丸・君が代の強制」(行政ルートを通じたアイデンティティ政治)、他方で「新しい歴史教科書をつくる会」という感動の物語派(大衆運動型アイデンティティ政治)が跋扈する昨今の日本であるから、ボスニア内戦からコンボ戦争にいたる、このアイデンティティ政治が引き起こした悲惨な出来事の教訓を、今や日本人以上により良く理解できるものはいないだろう。

三 歴史ブーム

ドイツ滞在中はテレビを比較的良好に観た。旅行者に毛がはえた程度の私のような存在が世相を知るためには、これが恰好のメディアであった。ある時期からはビデオ・デッキも設置して録画もするようになった。ホテルの案内ではデッキのレンタル料がけっこう高額であったので、いつそ買ってしまおうかとも考えたが、ある晩フロントのおじさん(夜遅くなると男性が勤務していた)に尋ねたら「買った方が安いよ。でもフリックさんと相談してみる」という返事であった。後日ホテル側の提示した料金が一月五十マルクと折り合えるものであったので、レンタルすることにしたのである。

折からドイツは歴史ブームであった。二十世紀が終わろうとしていたし、ドイツ連邦共和国ができて半世紀、ドイツ民主共和国の消滅につながったベルリンの壁崩壊から十年という重なった節目の時期だったせいもあるだろう。もちろん歴史ブームといっても、その焦点はヒトラー・ドイツおよびドイツの地における社会主義体制の歴史の総括にあった。九八年から九九年にかけてドイツ国防軍の歴史をあつかった『ヒトラーの兵士たち』(Soldaten für Hitler、六回

シリーズ)、ナチのエリート実戦部隊をあつかった『武装親衛隊』(Die Waffen-SS、三回シリーズ)、ヒトラー政権下の国内生活をあつかった『銃後』(Heimatfront、六回シリーズ)などのドキュメンタリーがテレビ放映された。これらは情緒的にならずに事実を冷静に再構成しようとする姿勢につらぬかれていて好感がもてた。こうしたシリーズは、日本と同様その書籍版(Bagelbuchと呼ばれる)も同時出版されることが多い。疲弊して座りこみ、脱いだヘルメットを片手に物思いに沈む一兵士の写真を表紙にあしらった『ヒトラーの兵士たち』の書籍版序文で公共チャンネルARD会長のウド・ライターは次のように書いている。

そのころ(たぶん八十年代―著者)歴史は学問としては攻撃的な流行の諸学によって脇に押しやられ、授業科目としては一人立ちすら危ぶまれねばならず、メディアに登場することもなかったので、賢明な人々は早くも八歴史の喪失Vを嘆いたほどであった。

しかし幸運にも事情は変わったのである。非歴史的なトレンドは転換し、歴史的な主題に対する公衆の新たな関心が歴然とあらわれている。ARDはこの展開を考慮するにやぶさかではない。壁の崩壊とこれによってドイツ民主共和国の歴史の蓋をこじ開けることが可能になったことが、まずは現代史をあつかうドキュメンタリーに新たな追い風となった。一九九三年にARDは『これがドイツ民主共和国だった』(Das war die DDR)というタイトルで七回シリーズを放映し、成功をおさめた。

.....

八国防軍の犯罪Vについての巡回展覧会には、きまつて長蛇の列ができる。悪天候について並んだ多くは若者たちであったが、第二次世界大戦に参加した多くの年輩者もいたのである。この展覧会には多くの批判が語られた。

左と右から突撃ラッパが吹かれ、政治的論争がしばしば真摯な討論におおいかぶさった。まさしくここにARDの『ヒトラーの兵士たち』シリーズと本書が一石を投じるのである。これらは危うい問題を回避せず、信頼のおける情報の提供を旨としている。

[Jürgen Engert(Hg.), Soldaten für Hitler, Reinbeck bei Hamburg 1999, S.7f.]

テレビにおける歴史ブームは、東独の消滅によって、その歴史的回顧のための条件がととのったことがきっかけとなったようである。西への逃亡者の射殺事件とか、シュタージ（国家秘密警察）によるスパイ活動といった国家犯罪の追及の波がまずあった。これらが主に西側からの社会主義体制の告発といった性格をもっていた一方、こうした動きが一段落すると今度は主に東側の人々から統一ドイツに対する幻滅感と失われたものへの郷愁があらわれた。「失われたもの」といつても、それはたんに社会主義ドイツにとどまるのではなく、その地における社会主義ドイツに対する抗議、すなわち民主化運動もまた含まれる。八九年十月九日に行われた、ライプツィヒ全市をあげた反政府デモンストレーションを当局と交渉しつつ平和裡に収めた「ライプツィヒの六人」の一人である指揮者クルト・マズーアの言葉「われわれが夢見たのは、統一した祖国ドイツではなく、新しい自由な国だった」が、この事情を端的に物語っている。人々の間に東（Ost）とノスタルジー（Nostalgie）からつくられた造語であるオスタルギー（Ostalgie）が広まるような気分もまた、テレビにおける歴史ブームと無縁とは思えないのである。郷愁と批判的総括とはもちろん一線を画すし、ときに對抗的モチーフでもあるが、これらが現在の歴史ブームの中に微妙に混ざりあっているように思える。九九年だけでも『これがドイツ民主共和国だった』の再放映をはじめとした東独もののドキュメンタリーがけっこうテレビ画面に登場していた。

そして東独を批判的に総括する延長線上には、当然のことながらヒトラー・ドイツの歴史との対決が出てくる。なぜならファシズムとソ連型社会主義を全体主義として批判的にとらえ、その対抗軸としてリベラルな民主主義をおく姿勢は、EUの進展にもなつて、その統合理念としてハヨーロツパVが強調されるにつれ、ますます強まっているからである。ドイツにとって二つの全体主義の過去との対決は、EUを拡大・強化する上で避けられない課題なのである。

「ファシズムの過去」との対決は、ドイツ連邦共和国の一貫した国是のように思われがちである。たしかに学界や言論界ではそう言えなくもないが、しかし大衆のメンタリティーの構造転換にまで及ぶものは、第一の波が六十年代後半の学生反乱とその知的な影響によるものであり、そして第二の波が現在進行しつつあるEU化によるものだろう。もはやナショナルなアイデンティティによらず、より普遍的な価値にもとづいた広域的な秩序形成をめざすのだから当然かもしれない。もちろんナシヨナリズムを再興しようとするネオナチという過激な反動をともなっているが、これもまた葛藤が大衆レベルで展開していることのあらわれと見ることもできる。九九年もハンプルク社会研究所が催行している「八国防軍の犯罪V展」は話題にことかかなかった。幸いにも怪我人はなかったものの高性能の時限爆弾をしかけられ、会場入り口付近を吹き飛ばされた。また写真の一部にドイツ軍の蛮行をあらわすものではないものが混じっていることが指摘された。これに対しては史料批判的に対処し、妥当でない写真は自主的に撤去すればいいだろう。ドイツでは「国防軍はナチとは違った」という善玉神話が広く行き渡っているので、その蛮行を暴き出す展覧会はきわめて挑発的な意味をもっている。それだけに賛否の立場が過激化しやすい土壌がある中で、大衆メディアであるテレビがこの問題に冷静に取り組んだことは評価されてよい。過去とどのように向かいあうかをおいて、その政治社会の品位とこれからの道を占うことはできないからである。

四 二人のユダヤ人

目を読書界に転じると、九九年八月に出版された文芸批評家マルセル・ライヒ＝ラニツキの自伝『わが人生』が翌年九月までベストセラー・リストのノンフィクション部門トップを走りつづけたのが印象的である。[Marcel Reich-Ranicki, Mein Leben, Stuttgart 1999]

ライヒ＝ラニツキはポーランド系ユダヤ人。しかしこう書いてしまうとじつは身も蓋もない話になってしまう。彼はある席で作家ギュンター・グラスから「あなたはいったい何者ですか。ポーランド人、ドイツ人、それとも」と尋ねられ、とっさに「半分ポーランド人、半分ドイツ人、そして完全なユダヤ人」と答える。

グラスはびっくりしたようだったが、しかしどうやら満足、いやほとんど大喜びだった。「もう一言もつけ加えるにはおよびません。そんなことをしたら、このすばらしい名文句をだめにしてしまうだけです。」私も私のとっさの発言をじつにうまく出来ていると思ったが、しかしただそれだけのことだった。というのもこの算術的な表現は効果的ではあったが、口先だけのものだったからである。ここには真実を言い当てているただの一言もないのである。私は半分ポーランド人であったことも半分ドイツ人であったことも一度としてなかったし、今後もしやらないことは疑う余地がないからである。私はまた生涯完全なユダヤ人であったことは一度としてなかったし、今日でもそうなのである。[S.12]

彼は少年の日、ドイツ文化にあこがれる母親の影響もあって、ポーランドの地方都市から単身ベルリンに送り出され

る。親戚の家に寄宿して学童期を過ごし、ギムナジウムもこの地で終えるが、ヒトラー政権下ゆえ大学への入学を断られる。世知にうとく、かつドイツ文化に全幅の信頼をおく母親にそそのかされて、わざわざベルリン大学総長のところに談判に行くものの「満杯」を理由に入学を断られてしまうのである。職について暮らすうち、一九三八年十月二十八日早朝、警察官にたたき起こされ、その夜のうちにポーランドへの強制移住の列車に乘せられてしまう。身支度の余裕もなく、手荷物バルザックの小説と替えのハンカチが入った書類鞆だけだった。しかしこの顛末を語る章は「見えないう手荷物をもって」と題されている。

しかし私はさらにあるものをこの旅にもって行ったのである。それはもちろん目に見えなかった。私をドイツから強制移住させる冷たい鉄道列車の中で私はこれには思っていたらなかった。この目に見えない、今や役に立たず余計なものに思われる手荷物が将来私の人生でどんな役割を果たすのか、その時は予感すらできなかった。というのも、こうして私を追放する国から、私はその言語を、ドイツ語を、そしてその文学を、ドイツ文学をもって行ったのであった。[S.160]

ではどんな役割をそれは果たしたのだろうか。たとえばドイツ兵とサッカーの話をしてあやうく難をのがれることもあった。ドイツ兵によるユダヤ人いじめはひどく気ままなところもあったから、そんなことが生死の分かれ目ということもあったようである。またその抜群のドイツ語能力をかわれて、ワルシャワ・ゲットーのユダヤ人行政組織で、占領軍であるドイツ側との文書のやりとりをする部門につくことで、ゲットーの状況全体を把握することができた。そしてもちろん後年、旧西ドイツで文芸批評家として大成する彼のアイデンティティの核をなしたわけである。彼がこの戦後

の生を生きることができたのは、ゲッターから妻とともに逃げだし、ワルシャワ市内に潜伏し、生きて終戦をむかえることができたからである。ドイツ文化の崇拜者である母親をはじめ多くの肉親は強制収容所で殺されている。

したがって本書は、ナチス政権下のユダヤ人迫害の模様を一被害者の観点から克明かつ生き生きと描き出していて、読者を引きこまずにはいないのである。本書がベストセラーになりえたのは、ナチス政権下の学校教育やワルシャワ・ゲッターの生活といった題材の興味深さ、あるいは著者の該博な文学的教養、そして『文学の四重奏』というテレビ番組のレギュラーであることによる知名度などもたしかにあずかっていたよう。しかしその成功の最大の鍵は、本書を一貫する「属さない人間」だけがもちうるような公正な態度ではないだろうか。いかなる集団的アイデンティティにも違和感をもつがゆえに、その「とらわれ」から自由な境地が生みだすユーモアと客観性こそ本書の真骨頂であり、加害者側であるドイツの読書界が本書を受け入れた最大の理由であろう。代表的週刊誌シュピーゲルは本書の成功を「アウトサイダーのための騎士叙任式」という見出しをつけて報じ、著者とのインタヴューを掲載した。[Der Spiegel 21/2000, S.250ff.] しかしいことは、著者ライヒラーニッキの名誉であると同時に、彼に名誉をあたえたドイツの読書界の成熟を物語るように思われるのである。

* * *

ベルリン滞在中はよく書店をのぞいた。とくにお気に入りだったのは、中心街クーダムの始点カイザー・ヴィルヘルム記念教会のむかいにあるフーゲンドゥーベル書店である。品揃えはもう一つであったが、本を棚から持ってきて自由に読めるように、各階中央部分に縦穴住居の遺構のようなソファ・スペースとその周囲に図書館にあるような閲覧テーブル、さらに二階にはカフェがあったので、コーヒーを飲みながら時折席をたつて本を物色し、時間をつぶすにはもってこいの場所だったからである。女性が料理のレシピを書き写していたり、若者が五、六冊つみあげてレポートらしき

ものを書いていたりした。さすがにトイレのドアには本の持ち込み禁止と書いてあったけれども。

というわけで読書界の話題をもう一つ。九九年にヴィクトール・クレンペラーが書き残した浩瀚な日記の戦後編がようやく出版された。[Victor Klemperer, *So size ich denn zwischen allen Stühlen - Tagebücher 1945-1959*, Berlin 1999] 著者は戦後一九六〇年に死去するまで旧東独で教職にあり、旧東独に対する辛辣な批判をふくむ日記が日の目を見ることになったのは、ベルリンの壁崩壊による状況の変化が背景にある。フーゲンドゥーベル書店では、彼のための特設コーナーが設けられていた。日本では『第三帝国の言語（LTI-IV）』（羽田洋他訳、法政大学出版局、一九七四年）の著者として知られているが、地味な研究者といったイメージを出るものではなかったろう。特設コーナーが設けられるほどの「有名人」なのだろうか。

彼もまたユダヤ人である。しかしこう言ってしまうとやはり抵抗感がある。彼は第一次世界大戦にドイツ軍人として従軍し、後述する彼の日記をもとにしたテレビ・ドラマには、つきあいのある書店の主人に「あなたは同化したユダヤ人だから・・・」と言われ、心外とばかりに「私はドイツ・ナシヨナリストだ」と言い返すシーンが出てきたりするからである。しかし彼の自己意識がどうであれ、ナチス政権下じわじわとすむ反ユダヤ主義立法のためにドレスデン工科大学ロマンス語文学教授の職から追われてしまうのである。じつはこの日記の戦前・戦中編（一九三三―一九四五）が一九九五年に出版されていて、二巻本の分厚い本ながらベストセラー入りし（刊行後一年間で十二万五千部）、今やナチ時代の研究にとって不可欠の文献と評価されているし、クレンペラー自身も「二十世紀の年代記作家」というタイトルを頂戴しているくらいなのである。[Victor Klemperer, *Ich will Zeugnis ablegen bis zum letzten - Tagebücher 1933-1945*, Berlin 1995] 学校関係者の求めにおうじて、若い読者のためにそのダイジェスト版も九七年に出版されている。おそらく社会科の副教材などに使用されているのだろう。この日本語訳が九九年五月に出版されていたことは帰

国後だいたつてから知った。「ヴィクトール・クレンペラー著、小川ーフンケ里美他訳『私は証言するーナチ時代の日記』大月書店、一九九九年。なお石田勇治によるくわしい解説がついている。」このドキュメントは要するに、日常生活のなかにだんだんと染みこんできて、この日常生活を成り立たせているものを、すなわち職業、家、友人、自尊心と自由そして最終的には生命をつぎつぎと奪っていく権力の作用の記述なのである。まだドレスデン工科大学の職にあって一九三三年三月二十二日の日記にはこうある。

ヴィーヒマン嬢が来る。勤め先のマイセンの学校で、みんないかに鉤十字の前にひれ伏しているか、解雇を恐れているか、互いに監視しあい疑心暗鬼でいるか話してくれた。

鉤十字をつけた男が、何かの用事で学校に来たそうだとたんに十四歳のクラスの子たちがホルスト・ヴェッセルの歌を歌いだした。廊下で歌うのは禁じられている。ヴィーヒマン嬢は監督役だ。「この喚き声をやめさせて」と迫る同僚たち。「あなたがやれば！これ、やめさせたら、わたし首だわ！民族の歌を妨害したってことで」——大声を張りあげつつける女生徒たち。

薬局で、鉤十字つきの練り歯磨きを見た。

恐怖の空気が充満している。ジャコバン党支配下のフランスはこうであつたに違いない。今のところ命を失うと震えているわけではない。が、パンと自由を失うのではと恐れおののく。〔訳書八頁〕

これはむしろ最悪の時代のはじまりにすぎなかった。ところで先に引用したARD会長のウド・ライターは同じ箇所でこう述べている。「歴史は大流行である。テレビにおいても。数年前にいったい誰が、ドレスデン出身のほとんど無

名のユダヤ系教授が書いた数千頁にわたる日記がベストセラー入りをはたすことができるなんて考えたろうか。ARDはまもなくこの日記を映画化するつもりである。」その約束どおり九九年十月十二日から日記のモチーフにもとづいた『クレンペラー あるドイツの生活』と題された、十二回シリーズのテレビ映画が火曜日と木曜日のゴールデンアワーに放映された。私は帰国のため最後まで観ることはできなかったが、「水晶の夜」とか「ベルリン・オリンピック」といった歴史的事件とのかかわりを時折挿入しながら、クレンペラー夫妻を軸にした、ビデオレンタル店の分類で言うところの「人間ドラマ」というところに力点がおかれていたように思う。そうであっても、つぎつぎとこれらの生活を成り立たせていたものを奪っていく迫害のエスカレーションとその恐怖はよく描かれていた。彼らが家を追い出され、「ユダヤ人の家」とよばれる一軒家に何世帯ものユダヤ人家族とともに住まわされていたとき、ある青年がひそかに海外の短波放送を聴いていて「ユダヤ人をガスで殺しているって」と伝えられたときのクレンペラーの慄然とした顔はいつまでも印象に残る。彼はナチの計画はユダヤ人のマダガスカルへの強制移住ぐらいだろうと思っていたのである。

このシリーズの監督の一人であるアンドレアス・クラインルトは、あるインタビューで「医者やキャプテンや思春期の可愛子ちゃんシリーズものの風土で巾をきかせ、視聴者のお馴染みになっているような時代にあつて、ヴィクトール・クレンペラーはシリーズもののヒーローではない。その扱いにくい矛盾した性格ゆえにクレンペラーはむしろアンチ・ヒーローであり、だからこそハテレビで観るVに値する」と語っている。「テレビで観る」は語源的に「離れて観る」であるから、その含みをいかした洒落にもなっているが、発言の主旨はパターン化したイデオロギーを再生産している通常のシリーズものに對する挑戦であろう。ここには大衆文化の典型的形式の中で、その典型的内容を打破し、視聴者を過去の歴史的現実に向かわせようとする監督の意図が示されている。スピルバーグの『シンドラのリスト』も主人公のヒーロー化とこのヒーローとの同一化によるカタルシスをまぬかれていないとすれば、これは大胆な試みとも

言えるが、もともとテレビにはそうした潜在的な可能性があるように私には思われる。一方で物語の再生産装置でありながら、他方で人々の日常性に寄り添うメディアであることによつて、物語化しえない事実の、この場合は過ぎ去ろうとしない迫害の過去を提供する装置だからでもある。シリーズ『クレンペラー』はこの両者を統合しようとする試みであつたと言えよう。

五 むすびにかえて

十一月半ば、肌寒く曇り空の多かつたベルリンから帰国して、見上げた空の青さにすがすがしさを感じた。むこうの旅行会社のキャッチ・コピーに「インディアン・サマーを体験しに日本へ行こう」というのがあつた。的を射た表現だと実感した。それにひきかえこの精神的な空気の息苦しさは何だろう。ネオナチ的な気分がほとんど中央にシフトし、山川草木にまで神々がひしめきあい、なおかつ憲法でお墨付きをもらつた一人の神がこのボスということになつてゐる。憲法上ゆるやかであれ単一文化の強制が正当化されている。ドイツにあつて日本にないもの、その一つがユダヤ系の人々による精神的・文化的貢献だろう。これが国民国家という閑ざされた時空に開口部をつくつてゐる。たぶんそこから普遍的なものの風が入ってくるのだろう。

（なかお けんじ 静岡大学教授）